

理想の街を求めて
SWEDEN HILLS
Dream



当時のスウェーデン村完成予想図

スウェーデンの「NESSWE 社」が基本プランを作成。その骨子は、●中心にスウェーデン交流センターを配置し、スウェーデンと同じ雰囲気の家づくりを行う。●開発地の3分の2は自然のままに残す。●住宅はすべてスウェーデンから輸入し、電線は地中に埋設する。

ふきのとうが雪をもたげ、世界が一斉に真新しい命の色彩に染まるスウェーデンヒルズ。1980年、北海道石狩郡当別町に2棟のスウェーデンハウス実験棟が建てられてから、この街は38年目の春を迎えます。バブル景気で浮き足立つ数年前の時代から、*「21世紀の家づくりのモデル」*と称えられるほどの事業を推進できたのは、

大好きな北海道で、夢を実現したかった

街づくりに関わる人々が胸に抱いていた、効率優先に勝る夢の力でした。

スウェーデンハウスの創業者である手取貞夫は、戦後すぐ、瓦礫まみれの街に組立住宅を提供する事業に関わりました。その後、住宅事業から離れながらも心から決して離れなかったのが、自身が育った愛する北海道に、理想の街をつくる夢。その想いは1976年、手取を、北欧を含む海外視察へ導き、厳寒の気候の中、堅牢さと断熱性を誇るスウェーデン住宅との出会いにつながるのです。

ああ、ここはスウェーデンに似ている。ここにしよう

海外視察団のメンバーには、後に聖路加国際病院院長となる日野原重明博士もお名前を連ねていました。日本に高齢化社会を支える街を実現したいという想いをスウェーデンヒルズに重ねてのご同行だったのです。また、

新世紀を開いた夢。

「私の夢をかなえてくれ」。そう言い続けた一人の熱意から、誰もが困難に思えたプロジェクトが、関わる者全員の夢に変わっていきました。私たちの出発点であり、スウェーデンとの文化交流の基点でもあるスウェーデンヒルズ。日本全国に前例のない街づくりは、ただ理想に向かい進む、無垢な志から生まれました。



札幌の中心部から車で約40分。石狩湾を一望できる丘陵地の変化に富んだ地形と豊かな自然を感じる森に包まれた街、スウェーデンヒルズ。ここには多忙な日々を送る現代が忘れかけていた、大自然を背景に悠々と日常を楽しむ暮らしがあります。人生をもっともっと楽しみたいご家族のための街、それがスウェーデンヒルズです。宿泊体験も好評実施中です。詳しくは www.swedenhills.jp または

スウェーデンヒルズ 検索

現在のスウェーデンヒルズ

「NESSWE 社」の基本プランを変えることなくスウェーデンの街なみを実現した現在のスウェーデンヒルズ。電線を地中に埋設し、電柱のない街なみを創出。豊かな自然を残し、緑景や雪景色に映える色あいに統一されたスウェーデンハウスがゆったりとした間隔で立ち並んでいます。

うまくやろうとするな、ありのまま、正しくやればよい

当時、スウェーデン駐在大使であった都倉栄二氏も、この街に想いを重ねられた一人です。スウェーデン政府から託されていた、日本にスウェーデン村を実現する構想に、当別町の環境がうつつけたことから、スウェーデンとの仲介役として多大なご尽力をいただくことになったのです。いくつもの夢がなくなり、構想は熟していききました。しかし当時、森林・灌木地帯のままであった現地を構想通りの街へ変える開発は、誰も経験したことのない困難きわまりないものでした。

当時の困難さを、開発担当者である近藤孝二はこう語っています。「スウェーデンで設計されたプランを基に、日本の基準に則した開発許認可を得ることなど問題が山積みでした。自然を残しながら人が安心して住むためには、様々な初期投資が必要です。日本では前例のない電線の地中埋設もそのひとつです。そんな時、手取さんに「誰もしたことがないからこそ情熱がわくんだ」とよく言わ

個人の生活を充実させる新しい世紀が開けていく

れて、その度にみんなやってやろうと一丸になりましたね。」
 また、スタート時の開発に携わった田付泰三は、回顧録にこう記しています。「あの頃は、まだ若かった私にできる仕事はないと落ち込んでばかりいました。でも『この仕事は時間のかかる仕事だから若い人でないとできない。うまくやろうとするな、ありのまま正しくやればよい』手取さんにそう言われて、決心がつかしました。」

1984年に住宅事業が目指すものについて手取はこう語っています。「単に住宅を売るということだけを考えているのではない。これからはますます個人の生活を大事にしていく時代に入っていくと思う。個人の生活を充実させる新しい世紀が開けていく。『正しいこと』は時代によって変わることも知れませんが。しかし、私たちスウェーデンハウスが目指す正しいことは、自然を大切にし、人の生活を充実させること。それはスウェーデンヒルズのスタート時からこの先も、決して変わることはありません。」